

© 1969

日本文学全集77 野間 宏集

昭和四十四年五月七日 印刷
昭和四十四年五月十二日 発行

著者 野間 宏

発行者 陶山 巖

印刷者 高橋 武夫

発行所 株式会社 英社

一〇一 東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三
電話 東京(〇三)六二一 振替 東京 二六五

印刷 大日本印刷株式会社

製本 大日本印刷株式会社

製函 文京紙器株式会社

本文用紙 十條製紙株式会社

クロス 東洋クロス株式会社

検印廃止

落丁・乱丁本はお取りかえします

日本文学全集

野間 宏集

編集委員（五十音順）

伊藤 整

井上 靖

中野 好夫

丹羽 文雄

平野 謙

装 幀

伊藤 憲治

挿 絵

土井 栄

目次

暗い絵

七

真空地帯

六

注解

四〇四

作家と作品

小田 実

四〇

年表

四三九

野間

宏集

暗い絵

一

草もなく木もなく実りもなく吹きすさぶ雪風が荒涼として吹き過ぎる。はるか高い丘のあたりは雲にかくれた黒い日に焦げ、暗く輝く地平線をつけた大地のところどころに黒い漏斗形の穴がぼつりぼつりと開いている。その穴の口のあたりは生命の過度に充ちた唇のような光沢を放ち、堆い土饅頭の真中に開いているその穴が、繰り返される、鈍重で淫らな触感を待ち受けて、まるで軟体動物に属する生きもののようにつも大地に口を開けている。そこには股のない、性器ばかりの不思議な女の体が幾重にも埋めこまれていると思える。どういふわけでブリューゲルの絵には、大地にこのような悩みと痛みと疼きを感じ、その悩みと痛みと疼きによつてのみ生存を主張しているかのような黒い円い穴が開いているので

あろうか。遠景の、羞恥心のない女の背のようなくぼみのある丘には、破れて垂れさがる傘をもった背の高い毒茸のような首吊台がよきによき生えている。そして長い頸と足をもった醜い首吊人がひよる高い木の枝にぶらさがり、長く伸びた爪先がひらひら地の上に揺れている。その傍には、同じように背の高い体の透いて骨の見える人々が長い列をつくって、首を吊ろうと自分の順番を待っている。痙攣した神経をあらわに見せる磯巾着の汚れた頭のように、何か腐敗した匂いを放って揺れている叢。

遠くの黒い地平線と交叉して立ちならぶ、木の葉一つない枯木のような首吊台。その中の一番高い裸の手を上げたような一つの首吊台を眼がけて、飛び集ってくる声のない黒い鳥の群、鳥たちはこの地平線を越えて、この大地の上に姿を現わした時、あの醜い囁いた声さえ失ってしまつたのかと思われる。その先頭の一羽の鳥は部厚い羽を不恰好に折りたたみながら、何か深い悲しみに捉えられて頭を垂れている。そしてひよる長い首吊台の上に足を揃えて身を停めようとしている。絵のほとんど中央には、磔刑にされたキリストの体が、半ば膝をつくように十字架の下に横わっている。このキリストは、何の苦しみの表情も何の悲しみの表情もなく、むしろ無表情

の薄っぺらい顔貌を持ち、それを取りかこむ人々の群が黒々と画面を取りまいてゐる。

またこちらには、爬虫類のような尾をつけた人間が股をひろげて腰を下し尖った口の中から汚れた唾液をはきかけてゐる。その股のあいだには、やはりあの大地に開いてゐると同じ漏斗形の穴がばかりと開いていて、その性器が、性器の言葉があるとすれば、その言葉でしゃべっているように思える。そのすぐ後には四つばいになった獣が、何か不潔な傷のためにいまにもちぎれそうになつた尻尾を、地面に引きずりながら、こちらを向けた顔だけは人間の形をして、苦しい嘆息の呼吸を続けている。

蛙の水かきの皮を五本の指の間にもつた人間、ひとでのように幾本もの足を体じゅうにはやしている人間、人間の足をつけて歩いている魚、それらがそここに匍匐うてゐる。これらの人間はまるで性器以外には何らの営みの機関をもちえないかのである。そしてその部分で食い、その部分で笑い、その部分で慨くのである。匍匐っているこれらの尾のある人々の傍に、低い木の切り株が切り口から細いくたの枝をさしのべ、舌を出し、それは焦がされた慾望と腐敗した肉体の匂いを放っている。ひとの股の形をした枝やもつれ合う毛や、嘲笑する

機関がその切り株の後のまばらなくさむらの中にちらついている。そのくさむらの前にやはり尾のある人間が、足を開けて坐り、何か自分の受ける苦しみがあまりにも大きすぎてというよりも自分の生活には苦しみ以外にないので、自分の生活を苦しみという言葉で表情する術さえ知らぬ無表情なそげた顔をして、自分の股の間にあいてゐるあの暗い穴をじつと見つめている。暗い少しの華やかささえないあらわに淫蕩な眼が、これらの風景をどこからか見つめている。それは淫蕩などではない。押しつぶされた生命がただどこか最後の一局部で生きている、こうした暗い不潔な醜い部分にのみ生きているのをその不潔な部分が羞恥しているのである。否、それは羞恥でもない。それは羞恥のような高貴な感情ではない。たしかにこの尾を持った匍匐っている人間のどこにこうした高い感情があるなどと言えるであろうか。あるいはまたそうした感情をあつた尾のある肉体のどこの場所で見現するのであろうか。この醜い大地にぽっかり開いている穴は、ようやく人類のルネサンスを迎えようとする歴史の中で、ズタズタに切り刻まれたアミーバーがなおも生き続けるようにようやく生れ始め発生しつつあった個人、個体の跡形だというのであろうか。たしかにその黒い穴は何かを愁訴している。何かを訴えたいにしてい

る。自己の存在をこうした醜い形の中にでも示そうとしている。あの尾のある匍匐している人間が、何か奇妙な魂のように股の間に大事につけているこの穴。たといキリストの磔刑の姿の中に穿たれていてさえ不思議には思えぬ黒い輝きのように穿たれ、開き、蠢動しているこの穴、また、そこには頸の短い乞食がいる。足の曲った氣狂いがいる。冷酷な賦役、重い岩のようにのしかかる農奴制の下に背中のがった農夫がいる。農夫はやせて、寒そうに汚いぶくぶくの上衣に身を防いでいる。盲人がいる。乞食は大きな二股に開いた木の足をつけ、松葉杖に代る短い棒をついている。乞食の背中には太い狐の尻尾が何本も縫いつけられて、歩きたびにそれが揺れる。それは揺れながら滑稽にひらひらする。これが乞食の笑いなのである。当時の支配者スベイン王フィリップ二世の専制政治に対する嘲笑なのである。そこには人間への嘆きがある。そして人間の不正や、恐しい凡庸や、不公平に対する戦いがある。憐憫がある。さらに高い愛がある。これらの化物を支えている精神の中には人間の矮小な姿の中に閉じこめられて燃えている深い愛があり、貧困に対する痛烈な憤怒がある。無智と愚昧と冷酷に対する反抗がある。そしてそれらが苦悩の上に強い姿となつて、烈しい形をとって、姿を現わしている。そして、こ

こには群衆への、集団への、民衆への強い執着がある。人々は集団以外としては現われない。祭の夜の、風景の中の点描としての、むれた蛙のような人間の集りとしての、團體をつけた人間どもの群としての、犬をつれた獵人がかえって行く農村の営みの中の人々の群としての、集団以外としてはあらわれぬ。そして、ここには民衆の最後の武器である笑いと諷刺があるのである。

これはフランドルの画家、百姓ブリューゲルの絵画集から深見進介の得た印象——奇妙な、正當さを欠いた、絶望的な快楽に伴うごとき印象、そしてまた、そうした暗い快楽の深い穴の中で無益に呻きもがいているとも言えるような印象の集りである。真白のフランス綴の部厚い菊判大の絵画集。これを深見進介に貸し与えた友、また彼とともにこれを繰り返し眺めた友は、ほとんどすべて若くして獄死しなければならぬという生涯をたどったのである。そしてこの画集もまた数知れぬ白い輝きを連ねて夜空を押し渡り襲うてくるB29の重い翼の嵐の下に、はね上る油玉とともに燃え、ただ曲りくねった鉛のガス管や、紫色に焦げてゆがんだ裸の鉄骨や溶けて薄緑に固まったガラスの塊りなどの間に、形もない灰となつて残ったのである。この写真版の絵画集が、油脂焼夷弾の飛び火を浴びて、綴り合わされた絵の一枚一枚が、流

れる黒い液体のような炎の中に焦げてはがれながら燃えていった時、この絵の中のひとでのような人間、犬の顔をつけた人間、尾をつけた裸の人間、あの暗い爛れたような穴を大事そうに股の間にもっている人間たちが大きないかなる力をもつてしてもとどめえない火災のあついはてりの中で、すでに紙の下に廻った小さい炎のために次々と火あぶりにされ、その汚い厭な正視しえぬような肉体を焦がし、醜い体を火のためにさらに醜く絞撃させるかのように歪めて、しばらくは燃えて行く紙の火の中に明な形で姿を現わし、焦げる紙の上にあぶりだしの字のように黒々と線をつけ、そしてやがてそれらの体も火となつて消えていった時、大阪全市は南の空から北の空へかけて、燃える炎であかあかと明らみ、急速な生命の危険をつたえる重い脅かすような響きを揚げながら、空を押し渡る機械の嵐が、幾千という巨大な鈍い光を湛えた重い翼の幾重もの重なりが、炎の明るみの中にしだいに大きな大阪市の全景をくつきり表わしてくる街の上に濛々とこめた火炎を越えて過ぎわたつてゆき、この空の中を押し移つてゆく、限らないモートルと大きな機械の重みに押しひしがれながら消えてゆく、奇怪な穴を持った人間どものうめきが、どこかその炎の中から聞えたかもしれないのである。このとき、画集の置かれていた工

場の寄宿舎の居室が焼けてゆくのを見ながら、深見進介の心はいよいよ暗く、防空頭巾と鉄帽の下の彼の顔は、大きな戦争が彼の生命から呼びだした生き生きとした生命の緊張のために輝いてはいたが、さらにいつそう暗かった。その時、ある軍需工場の一部門の責任者の位置にあった彼は特設防護団のいかめしい服装を着けて、この画集の置かれている部屋に移つてゆく炎を地面に立てた長い鳶口に寄りかかるようにして、苦しげに眺めていたが、すぐ消火作業のために団員を指揮する位置に走り去りながら、そのひとでのような足をもつた人間たちが、暗い闇の中で燃え上り焼け焦げるのを思うと、彼の心の中を何か震えおのくような感情が走り、彼の顔は鉄帽の下で、ちょうどその絵の中の人間の焼け爛れてゆくときの苦しげな表情を、赤々と燃える火に映えて示したのである。

この画集に眼を止めたものはあまり多くはないと言える。というのは、深見進介はこの絵画集を大事にしている、あまり親しくないものにはけつして見せることはなかったから。あるいはまたこの画集の意味を解こうと努力するもの、また少くともこの絵画集の荷なう暗い感情に意義を認めるものは、あまり多くはいないに違いないと思つたからであつたが、まずこの画集を彼に貸し

与えた永杉英作、その友羽山純一、その友木山省吾、その他二、三のものがこの画集を眺めたことがあるだけであると言える。彼は始終この画集を手元に置いてはいたが、学校生活をおえ社会に出るようになってからは、かたくなに誰一人としてこの画集を見せようと思う人間には出会わなかったのであった。学生時代の友、永杉英作、羽山純一、木山省吾、これらの人々は彼が京都の大学に在学中、ともに学び、ともに闘い、ともに苦しみ、時にはともに放蕩し、また、ともに意義なく時間を過した人々であった。支那事変の勃発の前後にわたる彼らの青年の時代、それは青年の強烈な精神が日々に光を放ち、ことごとくに激越な調子の表われる、排他的な口論と嘲笑と自己嫌悪と傲慢との奇妙に混合した三年間であった。友人たちは若くすべて偏狭であったが、その偏狭によって皆は、美しい精神を保持し、互いに切磋した。世の中にあつてはまさに何億の金に見ついても買えないあの純真を惜しげもなく使いはたし、不思議な表現ではあるが本能的な誠実の衝動が現われると、いかなる障害も止めえず、いかなる恐怖も阻止しえぬ生命の自由の羽ばたきが、人々の額を輝かせていた。これらの友はいずれも、青年時代のこの生活をいつまでも持続しようとしたため、戦争が進行するにつれて、あるいは民間の刑務

所につながれ、あるいは第一線から飛行機で内地に送られ軍の監獄に収容せられたのである。しかし、これらの人々の眼も、それほどしばしばこの画集に注がれたとは言えないのである。というのは、この画集を見るのは、あまり楽しいものではなかったから。むしろこの絵の集りは、見る人々の各自の置かれている社会的な位置、その家族の關係、各人の女との交渉、各自の思想等の暗さをそれぞれ各自にあまりにも強く思い起させたから。

深見進介が初めこの画集を見つけたのは永杉英作のアパートの一室であつた。それはその部屋みまの右隅の大きな白木の本棚の一番下の段の右端に置いてあり、いつも緑地の蔽い幕の端からはみでて、その部屋に入るたびにその純白の部厚い大きな画集の背が彼の眼を射るのである。形が大きく本棚の上の段には入らないので、永杉英作は茶碗や食器類を置くのに使っている本棚の下段の一番右隅に置いていたのである。深見進介はときにひとり、その本棚からその重みのある画集を取りだし、また時にともに頁を繰り、時にともにその絵について語り合ったのである。その画集の中の暗い、嘆きのような、痛み、呻き、疼いている人々の多くの姿は、彼にあらわに、彼自身の苦しみを思い起させ、彼はそれらの絵を見まいと思ひながら、しかしやはりその絵のもつ何か不可

思議な力にひかれてその頁を繰ることになるのである。しかしこのブリュゲルの絵が特に彼に強く逼り、彼の心に強い力の反射のように照りつけてきたのはある夜のことである。

当時彼はまったく切りつめた生活をし、彼の不幸な恋愛はほとんど破綻に近づいていた。そして彼の幾分長形の顔はその感情が激越に調子づいてくると、何かの拍子でほんの一瞬救われたように頬のあたりが少し美しく見え、くぼみの深い眼窩に溢れる涙でしばしば洗われるという状態であった。こうした熱い涙が顔をぬらす時、彼は肘や尻の部分のすりきれて光っている黒サージのみすばらしい学生服姿の自分を忘れ去ったが、その涙の訪れぬ不断的時期には自己に対する過信と絶望、謙虚と傲慢、野心と敬虔とに交互に見舞われ、烈しい活力から烈しい疲労に移り変る時を過すのである。そしてそれらの根柢に、自分自身に対する不満と社会制度に対する憎悪があった。その日も深見進介は朝からいつものように焦躁を感じ自分のそうした感情を制御しながらも幾分いらしていた。青年によく見られる自分の周囲のものがすべて自分に敵対しているような感情が彼を襲うていた。

大阪府庁に席を置き、いつまでも小官吏の地位にいる

父がその朝手紙を寄越し、この月は母親が病氣のため思わぬ費用が要り、節約第一にして欲しいと言ってきたのである。読書費は今月はなしにすませて欲しいと言いい、最後にこれは手紙のたびごとに父の書く文句であったが、思想問題に注意して日ごろの賢明をもっていたらずらに徒党に与せぬ方針を堅持されたしと結んであった。深見進介は昼近くその為替を封入した書留郵便を受取った。そしてその手紙をよこした父に腹を立てた。しかし彼は自分のその怒りの中から金銭の圧力が、彼の身をしめつけてくるのを感じた。それはある意味で哀れな醜い自由を失った感情であり、彼は自分のその感情の後に、汚れた光を放っているような父の姿を見出し、それを感じと見つめるようにした。父の姿が浮んでくる。それはその金銭の圧力感の中から形をとり、現われてくるのである。それは金に押し潰された種族の顔である。優しい心の働きを金に奪い取られたもののもつ顔である。金の中の老衰の表情である。左にゆがんだ長い鼻隆、臉の肉の薄い眼、短い眉。この眼は遠くを見ない。人々の顔の中で何を読み取ろうとするのか、しばしば小さく動く。しかも哀れに小さく動く。茶色に近い瘦せた頬、それは卑屈に属し、硬化した咽喉のあたりの皮膚、これは労苦に属している。そしてこれら父の表情を縛っているもの

は金銭である。

深見進介はいわばその父親の顔を心の中に抱きながら、その日一日を過したのである。学校の講義に出たがそれは型どおりに終り、すぐ宿に帰り、ドイツ語の勉強を始めたが捗らず、一日を無為に過ごすという思いが、彼の心を堪えがたいものにした。そして夕暮の気配が部屋の窓や机の上の書物に影をつけ始めると、深い悲しみというような一種の落ちつきさえもない、価値などにまったく関係のない焦躁に貫かれて、いつものように永杉英作のアパートに足を向けた。しかし深見進介は永杉英作のアパートに着くまでに食堂に立寄りそこでふたたび金の問題に出会い、そしてさらに、その当時の思想運動と呼ばれる小さな哀れな動きに出会わなければならなかった。街の金貸しと街の思想運動家たちが彼の途中に待っていたのである。そしてそれは金貸しと思想運動家と、こういう風に二つを並べて書いても少しも不思議ではないほどどちらも哀れな汚れた存在であった。

二

すでに日の暮れた神社の境内の曲りくねった坂道を下りきると、小さい暗い煙るような冷い暈をつけた電灯が電柱の高いところにあつて、十字路になった少し広い道

をぼんやり照している。その角の山ぎわに沿うた二階建の屋並の三軒目の表口の硝子戸が明々と光を道に投じている。深見進介は硝子戸を開け、意外に明るい食堂の土間に入って行った。安物の白塗料を用いてある部屋の新しい四囲の壁には白い電灯の光が照り返っている。店の間には左隅のテーブルの角の所で高等学校の学生が、空になった食器膳の上に夕刊を拡げてテーブルに乗りかかると同時に読み入っているほか、客は誰もいない。妙に時刻はずれの空気が部屋を充たしている。厚い松材に少しそり返って罅割れた六尺テーブルの上に、粗末な長い竹箸を入れた竹筒の背の高い箸立や、白い安物の湯飲み茶碗をふせた、木のくり抜き盆、アルミの大きい湯沸しが冷い影をつけている。この食堂に足を入れた時、深見進介の中背よりは少し大きい身体をつつんだ垢じみた学生服の姿は、光の中にぱつと浮びで、一步敷居をまたいで店の奥の方を窺っている顔は電灯の光りで不断よりは陰影の深い形を見せ、長い眉根やこめかみ、上方のあたりの曇った暗い表情の中に、若いものたちの顔に表われる、あの自意識と対人意識の皮膚の緊張が走るように思えた。

「いらっしゃい」親父の声が太く響いた。深見進介はテーブルの横を廻り、顔をふせるようにしながら、真直に

その声の方に寄って行った。台所口に続いた中の三畳の間の仕切りの暖簾の間から大きな鼻と大きな耳をつけた大柄の親父の顔が、客の姿をじっと見定めるように覗いている。それはまるでその親父の大きな鼻だけが、そこから覗いているというように思える。《鼻め、鼻め》深見進介はなぜということもなく心の奥でこう思った。するとこの言葉とともに、その時まで彼の心の深みに沈んでいた一つの押しつけるような圧力があらわな、眼に見える力となって現われ、彼の行手を遮るかのようになつた。それは新たに姿をもつて現われた金の圧力であつた。深見進介の足は一瞬土間の真中で止つた。彼は彼の心の片隅に自分の父親の顔を思い浮べた。あの短い半白の眉の中の弱い、伏せがちの父の視線が浮んできた。「いたずらに徒党に与せざる方針を堅持されたし」この父の言葉が彼の頭の中をちらと走り過ぎた。しかし彼は頭を左右に振ってこれらの言葉や姿を自分の心から振い落すようにしながら、親父の方に近寄って行った。奥の間の騒ぎが聞えてきた。深見進介はそれに気づいた。そして彼はなぜか自分の姿を隠そうという気持に襲われた。それは彼の同級生の小泉清たちの集りであつた。店の間に続いている、少し暗い電灯の六畳の間で将棋盤を囲んで、いつものように食後の時間を過しているのでは

る。深見進介は言葉もかけずにその傍を抜けるような気持で黒と赤の染分けの暖簾の方に進んで行った。そして暖簾を分けて上半身を斜めにしながら、胸から上を三畳の間の親父の大きな角火鉢の上に突きだすようにした。「今晚は」深見進介は低い声で言つた。そしてまるでこの厭な親父の鼻の形を見るのが自分に課した罰でもあるかのようにじっと親父の顔を見つめた。

「やあ、いらっしゃい」親父は顔を上げた。が、彼の厚いふくれた右頬の上を狼狽の影が通り過ぎた。そして、次の瞬間訪問者の心を一撃の下に打ち挫くような堪えがたい色が眼に表われ、顔全体に拡がってゆくように思えた。

「やあ、いらっしゃい。どうしたの。深見さん、今夜はえらく遅いじゃあないか。もうおでんの火、落してしまつたけれど、それでよけりゃあ、お上んなさいよ」親父の冷い顔の肌の下から笑いの表情が表われてきた。しかし深見進介は自分の心の底まで冷しこんでしまふような先刻の親父の顔を忘れることはできなかった。親父はたしかに彼がこの暖簾をくぐつてこの三畳の間に姿を現わすことを予期していなかつたのである。というのは親父は二重の眼をもっていたから。食堂経営の主人の眼と高利貸の親父の眼と。そして深見進介は彼の金融口座帳に

名を載せている客ではなかった。またそうした種類の客になる見込みのある客でもない。そうした金を借りに来る学生はもっと大まかな、もっと家庭のいい、「行き当りばったり」式の、親父の言葉で言えば、「その日の向き向きでことをやる人間」であつた。

「うん、ちょっとお願いがあつて来たんだけど。でも先に食事をすまそうかな」深見進介は笑いのもどつてきた親父の顔を見つめながら言つた。

「食べてくかね。火は落したんだけど、まだ冷えちゃあいないだろうよ——まあ、上へお上りよ」

「うん、食べるよ。せっかく寄つたんだから」

「小泉さん谷口さん。皆さん奥に来て、賑かだよ。お上りなさいな」

「うん、上らせてもらうけど、何があるの」

「なんにもないんだよ、あいにく今日は。おでんだけなんだがね」

「何でもいい。おでん貰おうか。けど、その前にちょっと親父さんに頼みがあるんだがね」

「おでんだつてちつとも、冷えちゃいないよ、いま火落して、俺も一休しようと腰を落着けたばかりだからね」親父はわざと気づかぬ風をしている。親父の顔はすでに余裕のある柔和な笑いを取り返し、それで武装してい

る。たしかにこの笑いは商売用の武装である。この笑いの後に半ば機械になつた彼の硬い心がある。長い失敗の人生の後でなお頑強に人々に抵抗しようとしながら、身体に比してきわめて小さい魂を金銭に掴まれた男の心、金銭への執着が軋むような響をたてる機械の心があるのである。そして、この小さい金銭の機械は学生の下宿に乗りこんで、辞書や衣類や時計やその大事な持物を抵当物件として取り上げる時、極度の疲労から古ぼけた埃をかぶつた街工場のミールリングのような音を立てることがある。しかしこうした疲労を伴う興奮がかえつて彼の背骨をしっかりと内から支えてくれるような感じが彼に少しの後悔も起させず、いっそう彼を駆りたてて彼の内の残り少ない「人間」を奪い去つてゆくのである。こういう一銭銅貨の色にも似た顔色をもつた男は日本の社会にはしばしば見られる。これは日本の社会の奥底にある造幣局で製造される多くの人間の一人にすぎない。そして先刻深見進介がこの親父の鼻を見ながら彼の父の顔を思ひだしたというのも、彼の父とこの親父とが一方は金貸しであり、一方は借り手に廻る方でありながら、社会の同じ場所で作造された人間であることに変わりはなく、彼らの顔には同じ銅貨の模様が打ちだされているからであるとも言えるのである。